

新聞さんの「永続革命論序説」を読んで

大谷美芳 (2025. 05. 04)

マルクス永続革命論(1848年ドイツ革命)に対して、レーニン永続革命論(ロシア革命)を「揚棄された」と規定し、それを適用して社会主義革命の陣地戦を構想する。これが主旨。マルクス・レーニン主義の政治理論の勉強になった。

「…資本主義、労働者階級、国家…これらの変容に対して蜂起の陣形を形成する陣地戦が必要である。陣地戦を行うためには揚棄された永続革命論が必要であり、それは政治的平等=民主主義と社会的平等を闘い取ることを通してのみなしうる。」これが結論。それに同調し、「民主主義をどう社会主義へ転化するのか？」という問題意識でコメントする。

(1) ロシアや中国の革命は易しい？ 東方は機動戦で西方は陣地戦？

「…レーニン、トロツキーによって『ロシアのような遅れた国では革命を行うことは比較的たやすいが、建設することは困難である。先進国では逆に革命を行うことは困難だが、建設することは比較的たやすい』と言われ、後にグラムシが『東方と西方』として東方の機動戦、西方の陣地戦という…論を展開した。」この論は少し違うのではないかな。

ロシアと中国で、達成されたのはブルジョア革命である(民族解放はブルジョア革命)。社会主義革命はそこでも挫折した。容易ではなかった。「東方」、ロシアと中国の民主主義革命も機動戦だけではない。とりわけ中国革命は「農村根拠地=解放区」(対抗社会)と「農村から都市を包囲」。農村における農民の反封建制闘争は陣地戦である。「西方」の社会主義革命も陣地戦だけではない。プロレタリア階級独裁の実現、機動戦が必要である。

民主主義革命も社会主義革命も、社会革命であり、陣地戦と機動戦の組み合わせになる。社会革命は政治革命を必要とし、陣地戦=対抗社会が機動戦と政治革命を準備する。

(2) 1848年ドイツ革命 永続革命論の提起と撤回 それをどう理解するか

「マルクス、エンゲルスによる1848年革命時点での永続革命論は、エンゲルスの総括の通り一旦放棄された。資本主義に生命力があり永続革命を貫徹する客観的条件がなかったのである。」この論も少し違うのではないかな。「客観的条件」とは何なのか。

1848年のドイツ革命はブルジョア革命であった。それに対して永続革命論が提起された。プロレタリア階級が直面する民主主義革命を主導し徹底し(プロレタリア階級のヘゲモニー)、社会主義革命へ転化させる。永続革命論は二段階連続革命論である。

ところが、直面する革命が変化した。ブルジョア階級が封建制に妥協し、ブルジョア革命が上からなし崩し的に実行された(プロレタリア階級がそれを許した)。カイゼル専制君主制が、絶対主義=封建制国家からブルジョア国家=ボナパルティズムへ転化した。

革命の根幹は国家権力の問題である。国家がブルジョア国家へ変化し、直面する革命が社会主義革命へ変化した。永続革命論は適用できない。撤回された。こうではないか。

「…準備としてのプロレタリアートの成熟を促す組織戦が必要であり、それは主として労働組合と政党によってなされた。」しかし、社会主義革命の情勢は未成熟であった。

そこで、革命をどう準備するか。社会主義革命は、プロレタリア階級の階級闘争を原動力とし、プロレタリア階級独裁を必要とする(『共産党宣言』では「プロレタリアートを支

配階級へ転化」or「支配階級として組織されたプロレタリアート」)。その実現(機動戦)は将来、当面は労働者階級を社会民主党と労働組合に組織する(陣地戦)。こうなった。

(3) ロシア革命 「止揚」された永続革命論 それをどう理解するか

「帝国主義時代の到来とともに革命の現実性が日程に上り、それと共に永続革命は復活した。」ここもロシア革命に永続革命論が適用された理由が少し違うのではないか。

帝国主義段階や革命情勢や「革命の現実性」はあるが、それではない。理由は単純明快、国家の性格に規定された革命の性格である。ツァー専制君主制はまだ絶対主義=封建制国家であった。直面する革命はブルジョア民主主義革命であった。だからである。

「だがそれは、その前期に準備された組織戦を媒介にした、いわば止揚された永続革命論である。」「レーニンの『二つの戦術』は…革命的民主主義的独裁=徹底した民主主義を主張した。」「そのためにはブルジョアジーや他の階級の政党をはじめとするヘゲモニー装置に対抗する労働者階級のヘゲモニー装置=党を中心とした陣形を必要とする。」「民主主義を社会主義に転化するのは労働者階級の階級意識の成熟以外にない。」「『党』という意味での外部からの『外部注入』が必要である」。

いきなり陣地戦、「組織戦」や「党を中心とした陣形」や「外部注入」、これでは「止揚」された永続革命論の眼目、つまり何が革命を転化させるか、それがはっきりしない。まず機動戦、革命の根幹は国家権力、「革命的民主主義的独裁」を強調するべきである。

①「止揚」された永続革命論の眼目は

「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」

「マルクス主義はプロレタリアートに対して、ブルジョア革命から遠ざかれとも、それに参加するなとも、革命の主導権をブルジョアジーに握らせよとも、教えていない。マルクス主義はむしろ、ブルジョア革命に最も精力的に参加せよ、徹底したプロレタリア民主主義のため、革命をとことんまでやり抜くために、断固として闘え、と教えている。」「(『二つの戦術』) ここまではマルクスの永続革命論。

これからがレーニン主義の「止揚」された永続革命論。「『ツァーリズムに対する決定的勝利』とはプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁である。」「社会主義的独裁ではなくて、民主主義的独裁である。」「(同) プロレタリア階級が民主主義革命で革命国家を組織し権力を握る。マルクスはまだ提起していなかったそれを、レーニンが提起した。

民主主義革命における社会革命は、封建制に対する農民の土地革命である。しかし、農民は富農=ブルジョアと中農=小ブルジョアと貧農=半プロタリアに階級分化する。そこで、プロレタリア階級が、労農同盟(農民全体との同盟)を通して農民を指導する。封建制に対して、階級的に統一し階級闘争に組織し、革命の原動力とする(陣地戦)。

こうして、革命国家を「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」として樹立し(機動戦と政治革命)、民主主義革命を徹底する。これが「止揚」の眼目である。

・何が民主主義革命を社会主義革命へ転化するのか？ 動因は階級対立と階級闘争

「プロレタリアートは実力で専制政府の抵抗をおし潰し、ブルジョアジーの動揺性に左右されないようになるため、農民大衆を味方に引きつけて民主主義的変革を最後まで遂行

しなければならない。プロレタリアートは実力でブルジョアジーの抵抗をおし潰し、農民と小ブルジョアジーの動揺性に左右されないようになるため、半プロレタリア大衆を味方に引きつけて社会主義的変革をやり遂げなければならない。」(同) こう展望した。

民主主義革命の徹底は、資本主義を成長させ、階級分化と階級対立が進む。そこで、プロレタリア階級はブルジョア階級に対する階級闘争を進める。労農同盟を貧農=半プロレタリアとの同盟へ転化、それで革命国家をプロレタリア階級独裁へ転化、さらにそれで革命を社会主義革命へ転化。こういう転化の根源的な動因は階級対立と階級闘争である。

②「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」は複雑な経緯

陣地戦が弱かった

ボルシェヴィキは、中国共産党と比べると、農民、とりわけ貧農=半プロレタリアに対する「ヘゲモニー」が弱かった。エスエルやエスエル左派に組織され奪われていた。

プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁も、国家権力としては樹立されなかった。2月民主主義革命の後の、二重権力状況のソヴィエトがそれであったが…

10月革命は、臨時政府(ブルジョア階級独裁)の打倒とプロレタリア階級独裁の樹立、社会主義革命であった。帝国主義戦争の危機から、政治的に飛躍し経済的現実を越えて突進した。内戦と戦時共産主義は言わば社会主義的独裁であった。エスエルにもエスエル左派にも離反され、苦戦した。それでもプロレタリアートを組織して勝利したが…

結局は、農民が不満を蓄積して爆発し(1921年クロンシュタット反乱)、そこで戦略的退却になった。「新経済政策=NEP」(1921年～)で市場経済を導入し、農民に妥協し経済的現実に対応した。それは実質、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁であった。

(4) 永続革命では全て官僚制国家資本主義が出現

スターリン主義をどう総括するか

ロシア革命は、また中国革命もベトナムやキューバなどの革命も、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁=人民民主主義独裁(中国など)の下、工業化と農業集団化で社会主義革命へ前進しようとした。しかし、全て挫折しブルジョア革命に終わった。官僚制国家資本主義が出現し、国家は官僚ブルジョア階級の独裁へ転化した。

「スターリンによる計画経済と農業集団化…上からの革命」。「社会主義を生産手段の国家ないしは公的所有に切り縮める」。こういう総括だが、もっと言い切るべきである。

「上から」の工業化・農業集団化は、農民の収奪と資本の本源的蓄積になった。「国家所有・集団所有=社会主義」論と「社会主義建設」論は、生産力主義になる。生産力主義は、生産と蓄積と再生産・拡大再生産を官僚が管理する官僚主義になる。官僚主義は、官僚が国家所有・集団所有の生産手段を実質的に所有して階級となり、労働者階級を賃金奴隷化し搾取する官僚制国家資本主義になった。それがスターリン主義である。

・中国文化大革命は永続革命=二段階連続革命の社会主義革命 破綻をどう総括するか

ソ連を官僚制国家資本主義と批判し「他山の石」とし、人民民主主義独裁下の国有化・集団化で官僚が生産を管理する官僚主義と闘争した。しかし、官僚制を即時に廃絶しようとした結果、官僚に対する打撃主義となり、観念論の主観主義(「私心と闘う」など)になった。

社会的生産は崩壊し、革命も分裂と対立で内部崩壊した。

官僚による管理は即時には廃絶できない。労働者階級が官僚を統制し管理を学び、やがて取って代って自主的大衆的に管理する(コンミュン・ソヴィエト型国家による生産の管理を実現する)。こういう持久的な下からの階級闘争(陣地戦)が必要であった。

国家をプロレタリア階級独裁へ転化し、革命を社会主義革命へ転化する。その根源的な動因は階級対立と階級闘争である。生産の管理をめぐる階級闘争が必要であった。

それができなかった。1989年天安門事件、そこで最終的に国家が官僚ブルジョア階級の独裁へ転化し、官僚制国家資本主義が確立した。資本主義が未発展でもプロレタリア階級のヘゲモニーでブルジョア革命を社会主義革命へ転化する「主観的能動性」、それが資本主義化の唯物論的必然性に包摂された。マルクス・レーニン主義の永続革命論=二段階連続革命論が破綻した。プロレタリア階級は最後の勝利までは敗北。こう総括するしかない。

(5) 現代世界と社会主義革命の陣地戦

①現代世界論 資本主義の不平等発展と帝国主義の覇権闘争 「北」の体制的危機

「北」の先発資本主義に対する、「南」の後発資本主義(「グローバル・サウス」)の不平等発展がある。後者は、中国や韓国・台湾やASEANやインドなどアジアを中心とし、官僚制国家資本主義と開発独裁の双生児であり、19世紀のドイツ・日本を受け継ぐ20世紀の後発資本主義である。また、「北」の先発帝国主義=米国(+西欧・日本)に対する、「南」の後発帝国主義=中国(+ロシア)の覇権闘争もある(ロシアは「南」ではなく「北」の最後尾だが)。

その中、米国・西欧・日本、「北」の先発資本主義は、金融資本主義化し、工業は空洞化し、格差の拡大と貧困の蓄積、労働者階級が没落している。「寄生的な腐朽しつつある」、「死滅しつつある」(レーニン「帝国主義論」)、そういう資本主義である。ケインズ主義(～1970年代)は増大する労働者階級を「包摂」した(ブルジョア民主主義)。しかし、新自由主義(1980年代～)は、「差別・分断」で増大した労働者階級を大分裂させた。

労働者階級の多くが、没落に憤激しブルジョア民主主義に絶望し、差別主義と排外主義に動員されている。トランプ主義は現代のファシズムである。早くも予防反革命。「北」の現状は、まだ革命の「前夜」までとはいかないが、体制的危機である。

②陣地戦論 新開さん提起の2点にコメント 労働者階級の階級的統一と階級闘争

社会主義革命の原動力はプロレタリア階級の階級闘争である。新開さんは、資本主義や国家や労働者階級の「変容」に対応して陣地戦を構想しようとしている。そうすると当然、労働者階級の「大分裂」が最重要問題になる。それについて、次のように提起している

「資本主義の変容は…労働者階級の変容を伴う。…その最大のものはいわゆる非物質的労働の拡大である。先進国では、製造業労働者(ブルーカラー)は20%前後であり、サービス(商業・管理・事務等)労働者が60%以上である。…第二に非正規雇用の増大であり、それには移民労働者問題が関連する。第三に中間層の没落分解と格差の拡大である。」

民族的人種的・性的・身分的(非正規雇用)などの「差別・分断」は階級対立を覆い隠す。それに反対する闘争が重要になる。それは民主主義を拡大し、階級対立を鮮明にする。

2つ目の提起はミュニシパリズムであろう。「2011年のオキュパイ運動など…労働者と

いえども『市民』として、ネグリの言葉を使うならマルチチュードとして登場した。」

国家と行政は、資本と労働の階級関係を制度化し管理している。労働時間や最低賃金制や正規・非正規の雇用制度、医療・介護の保険や年金や生活保護、育児・教育など…、実に様々である。市民が、この様々な問題で、地方から中央へと行政と国家に対して闘争する。それは、総資本と総労働の対立と闘争になる。

これらの闘争は、労働者階級の統一した階級闘争を組織する陣地戦で、重要な位置を占めるのではないか。トランプ主義と現代のファシズムに対する現代の人民戦線は不可避。1930年代のフランス人民戦線、それは、プロレタリア階級独裁=機動戦が欠落したが、経験した最大の、社会主義革命の陣地戦として総括しなくてはならない。(おわり)